

神系図 (20190720 各務原歴史研究会講演) No1

在野一生作成

I. 列島創世神

伊邪那岐命・伊邪那美命—(三貴子) 左目(東):天照大神、鼻(中心):スサノオ、右目(西):月読尊

II. 天孫神

【天】天照大神(BC1C頃)—【天子】天忍穗耳命—【天孫】兄:丹波降臨:天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊 ……尾張氏、海部氏
后:三炊屋姫(弥富都比売、長髓彦妹)
高皇產靈神 — 栲幡千千姫命 弟:日向降臨:天饒石國饒石天津日高彥火瓊瓊杵尊 ……天皇家
后:木花開耶姫命(神阿多都比売、大山積女)

III. 天火明命(尾張国一宮祭神)の系譜

↓高座結御子神社(熱田神宮摂社) 葛城国造垂見宿禰
↓高座山の神(春日井) ↓名古屋市昭和区に地名有、江南市に村久野町 ↓高天彦 ↓由基理命 ↓彦田田須命
天火明命—天香語山命(高倉下)—天村雲命—③世孫:倭宿禰—④笠水彦命—⑤笠津彦命—⑥建田勢命—⑦建諸隅命—⑧日本得魂命
天道日女 穗屋姫 丹波伊加里姫 白雲別神女:豊水富姫(井比鹿) 美濃 伊富岐神社
市杵島姫命
※③天忍人命(尾張氏祖神)以降、後裔神は悉く葛城(土蜘蛛=出雲神)族女を娶る。

IV. 天火明命と美濃

・葛城国造垂見宿禰—鸛比売・⑨開化天皇 —建豊波豆羅和氣(武豊) *秀真伝ベース、「葛城」は土蜘蛛(出雲)族の地
—高千那毘売(・建田背命)—味師内宿禰 —武内宿禰 —葛城氏(→真清田神社神主家)—⑭仁賢・⑮額宗天皇
・亦名垂見宿禰—兒(⑥建田背命)—垂見宿禰(一云⑦建諸隅命)—兒(一云彦田田須命)→⑧日本得魂命、葛城国造 *海部氏勘注系図
美濃国二宮伊富岐神社 美濃国三宮伊奈波神社 樞森神社(墓は各務原市蘇原古市場町)
彦田田須命(⑧日本得魂命)—⑨日葉酢媛 —⑩五十瓊敷入彦命—⑪市牟雄命
垂仁天皇 后:淳熈斗姫命(金神社)
妹:大中姫命(稲木神社、江南市)
妹:倭姫(天照大神を伊勢へ)
・村国神社(石凝戸邊命、天村雲命后と推測) ※正三位飛鳥田神社(飛鳥田大神):祭神の実像は飛鳥を初めて宮とした天火明命と判断。
・村国真墨田神社(天火明命) *当社が本来の美濃一宮との説あり
*針綱神社(天火明命⑤⑥⑫⑬⑭孫神を祭る、犬山市) *東宮前方後方墳の神社

神系図 No2 (在野一生)

V. 出雲神族系譜 ○数字は大国主の代目

・幸(岐)神三神 境界神 (→道祖神)

出雲父(伯耆大山)神 久那斗(船戸)神 cf. 狗邪韓国(彌烏邪馬国→任那)

出雲母(三瓶山)神 佐比賣神 cf. 斯羅国沙梁部

出雲王子 猿田彦

※熊野大社祭神: 伊邪那伎日真名子・加夫呂伎熊野大神・櫛御氣野命

須賀神社祭神: 清之・湯山主・三名・狹漏・彦・八嶋篠 (スサノオと奇稻田姫姫の子、西出雲王家の初代大国主)

* 八嶋篠は、任那と斯羅両国の王子→猿田彦と推定

・東出雲王家(富家)

① 菅之八箇耳—③ 兄八島士之身(八島手)—⑤ 深淵之水夜禮花(子守神)—⑦ 天冬衣命—積羽八重事代主—鳥鳴海—国押富—
—田干岸円味—布忍富取成身—籾張代科戸箕—弩美宿祢(野見宿禰) ↑ 国譲り 弟: 建御名方神

* 子守神社(可児市中恵土)、富田荘(加茂郡富加町西部)

・西出雲王家(神門臣家)

② 八島士之身(八島篠)—④ 布葉之文字巧為—⑥ 臣津野(国引主)—佐和氣(花長下神社、揖斐川町)—⑧ 八千矛神(三輪神社、揖斐川町)
—速瓮之建沢谷地乃身—瓮主彦—身櫓浪—遠津山岬多良斯神(鳴海杵神社、犬山市) ↑ 国譲り

・特殊な祭神(出雲と揖斐だけに存在)

赤衾伊農意保須美比古佐倭氣命 * 出雲では伊努神社、伊農神社。天津甕星神の可能性有。Cf. 金生山「赤坂」地名。和邇坐赤坂比古神社。

↑ 出雲口伝の佐和氣(=八千矛神の父、味鋤高彦の祖父)と判断→三輪神社(揖斐川町惣社)祭神の大国主は八千矛神。

后: 天甕津日女命 * 伊努神社

VI. 金山彦(伊邪那美命の嘔吐物から化生)と天稚彦、味鋤高彦

金山彦—天津国玉神—天稚彦(喪山神社、美濃市)

稲羽八上姫 |

| ———— 下照姫: 上神(かさがみ)神社、美濃市

八千矛神(八代目大国主)

| ———— 味鋤高彦根

多岐津姫(江ノ島神)

<注> 岐阜市に稲葉、各務原市に稲羽地名。八上姫の出身地は各務原では?

<注> 下照姫=木股姫=御井神

養老町、各務原市稲羽(大国主第一子御井大神)に御井神社。

<注> 高根、味鹿(犬山)、味美(春日井市)、味鋤(名古屋市北区)地名。

※ 齋木雲州氏の神系図をベースとして作成

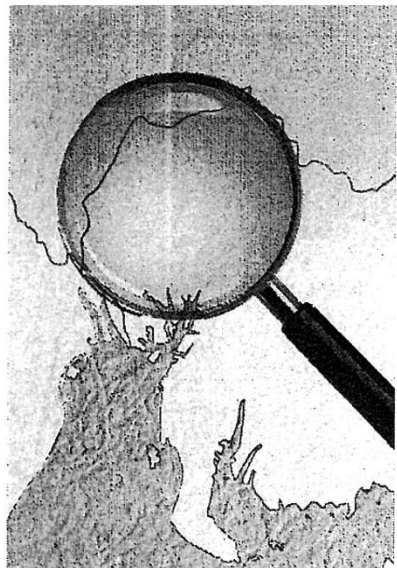
※ 『出雲国風土記』意宇郡の条の在神祇官社「伊布夜社」、『延喜式神名帳』の出雲国意宇郡の「揖屋神社」伊弉冉尊

濃尾探当照

その六十二

岐阜は「岐神」の府

在野一生



五年余続いた当連載もいよいよ最終盤を迎えています。ご愛読いただいた読者の皆様に深く感謝しています。

以後の四回で①一言触れておきたい事、②インタビュ形式で過去連載のまとめと補足、③新連載の紹介を行いたいと思います。それでは、今号は連載をしていく過程で改めて私なりに確信を得た「岐阜」名の由来について一筆啓上したいと思います。

「岐」は周の故事由縁の名称か？

岐阜は、関ヶ原、承久の変、壬申の乱と天下分け目の大戦が行われ、「美濃を征する者は天下をも征する」とまで言われたほど重要な土地柄です。織田信長も美濃を攻略して岐阜城を拠点とし、「天下布武」を宣言しました。衆市衆座を開

設するなど、岐阜は新時代の幕明けとなった場所です。

この「岐阜」について、信長の一代を記した「信長公記」という書物の首巻四四段に、「信長が井口を岐阜に改めた」という記事が載っています。

この点について、岐阜県はそのHPにおいて次のように説明しています。

●織田信長が、尾張政秀寺禅僧の沢彦宗恩が進言した「岐山・岐陽・岐阜」の三つのうちから選んだ。

※沢彦和尚は、中国の「周の文王、岐山より起り、天下を定む」という故事にならってこれらの地名を考えた。

●信長は「岐阜」を選んで、稲葉山城下付近の「井口」を「岐山」に改めた。

この観点から、「岐阜」は、周の故事から命名された」という一般的な見方が広

まっています。しかし、本当にそうなのでしょうか？ 試みに「安土創業録」を確認してみます。

「澤彦老師岐山岐陽岐阜此内御好次第にしかるべしと、信長曰諸人云よき岐阜然るべしと、祝語も候哉と、澤彦曰周文王起岐山定天下語あり此を以て岐阜と名付候、無程天下を知召候はん」(国家館蔵サイトより引用、句読点を加下)。

この話の流れは……●澤彦老師が、岐山、岐陽、岐阜のどれがいいですかと尋ねた。●信長が、皆が言いやすいから「岐山」がいいとし、祝言も求めた。●応えて澤彦が「周の文王が岐山に起こって天下が定まった」という故事をあげた。

この経緯から、「岐山、岐陽、岐阜」という三呼称は信長命名以前に存在していた名称であり、周の故事から三地名を

考えた(生み出した)という岐阜県HPの記事や一般の見解は誤りである事がわかります。

信長命名前に三種の「岐」名が既に存在していたという事が肝心な点です。

「岐阜」の意味は？

「岐阜」という一見意味不明な呼称に関する従来の見解に対して、私はかねてから違和感を覚えてきました。

まず第一に、「三種の「岐」系呼称に古代性が感じられ、信長命名前に元々あったと考えられるからです。

次に、当連載五八・六一で述べたように美濃が出雲色の濃い土地柄だからです。出雲族の出自を追求した時、同族は殷やその王族である箕子朝鮮系諸にあると考えられるので、注1、殷を滅ぼした周の故事を元にして地名をつけるというのとは不自然さが伴うのです。

では、なぜ「岐阜」という呼称が発生したのかという点について、以下に私見を書き留め地名譚に一石を投じたいと思います。まず、美濃が本質的に出雲系の土地柄であるという事を改めて確認しておきます。

①揖斐に出雲固有神を祭る神社がある。上下花長神社は、出雲固有の天磐津日子女

命と赤衾伊弉意保須美比古佐倭氣命(八千矛神の父)夫婦神を祭っている。

②揖斐の総社は三輪神社で八千矛神(大國主)を祭っている。

③この二点から、揖斐は、伊(イ毛)部の転訛と考えることができる。

④美濃国一宮・南宮大社がある「不破」は、出雲副王・事代主神の亦名頭書「布波」同音であり、同社祭神の金山彦が八岐大蛇族根拠地で祭られている事(西利太神社)。

⑤出雲王子猿田彦を祭る白鹿神社やスサノオ由縁の八咫神社が多く分布している事。

⑥美濃は、狗奴国の地であり注2、同国は時代背景を念頭に置けば、弁韓・狗邪韓国(出雲父神・久那斗神の出身国)に比定できる事。狗邪・久那斗神の出身地に比定できる事。狗邪・久那斗神の出身地に比定できる事。狗邪・久那斗神の出身地に比定できる事。

⑦席田郡大領が「賀羅造」を賜姓されたように、美濃は伽耶(狗邪韓国)族の地。⑧瑞龍寺山頂墳丘墓を原点として、古墳時代初期において出雲族がこたわった方形古墳が地域一帯に展開した事。

このように美濃は出雲族の開拓地です。そして、出雲父神・久那斗神は、古来、境界を護る群邪神である事から「岐神」と表記されました。であれば、出雲神族が展開した美濃の地は「岐神の府」

10:04
2F
303
2
利
記

であり「岐阜」と呼ばれるのは必然です。ちなみに、各務原市東部の大規模団地一帯には、かつて岐神の別称である「オノ神」という広域の字がありました。

織田家は越前二宮・剣神社の神官家ですが、四隅突出方形墓が存在する越前は元々出雲系の土地柄であり、同社祭神もスサノオですから、織田家は出雲父神・久那斗神を熟知しており、美濃が出雲伊那斗神族の開拓地であった事をよく承知していたはずで

『美濃川諸旧記』に「稲葉山を岐山、川を岐阜と呼び、信長が岐山・中節・井ノ口・今泉・桑田を合併して、岐府と称した」とあります。この説明が最も自然な形に思えます。

△注1▽「推論 古代濃尾平野における産鉄族の展開」在野一生・春日井たから研究会紀要四(一)〇一六・三・三二参照。

△注2▽「幻の王国・狗奴国を旅する」赤塚次郎・風媒社二〇〇九年参照。

在野一生(ありのいっせい)
作家、地方史家。東北アジア史をベースにおいて濃尾平野の古代史を探る。遺跡の存在や分布を重視しつつ、記紀など各種神話、地域伝承、神社由緒、古史古伝なども視野に入れ、民俗学的視点からも考察するスタイルをとっている。